

プライバシー意識からみる社会：序説

ゴフマン社会学による社会変化の分析の可能性

阪本俊生

1 はじめに…プライバシーの歴史性について

本稿は、プライバシー意識を手がかりに、近代化された社会の変容を考察する。ただし本稿は、ゴフマンをはじめとする社会学の理論研究およびプライバシー意識の概観に基づいて仮説をまとめたものである。そのため、本稿の議論は、今後のさらなる調査や研究による検証を経る必要がある。序説としているのは、そのためである。

プライバシーが歴史的で文化的な概念であることは、これがいまだにカタカナでしか表現されていないことから見てとれる。この言葉を日本語に訳そうという試みがなかったわけではない。1929年に山崎光次郎が『新聞道徳論』において「内秘権」と訳したり、1933年に榎村専一が『新聞法制論』において「秘密保持権又は内秘権」と訳したり、1935年に末延三次が『英米における秘密の保護』において「秘密権」と訳したりしてきた。だがいずれも定着することはなかった。つまり、日本語にはうまく当てはまる概念、そして言葉がなかったのである。

しかしこれと同様の事情は、実はプライバシー意識が発祥した欧米社会にもみられる。もちろん、プライバシーという言葉そのものは、もともとあるものの、今日のような意味でこの言葉が用いられるようになったのは、近代化以降のことであるといわれている。そしてプライバシーの意味の中身は、実はいまだに曖昧で、明確に定義すらされていない。もちろん、日常的に用いられる重要概念であるだけに、これを定義しようという試みは、さまざまになされてきた。イギリスでは、1972年から翌年にかけて、ケネス・ヤンガーを委員長とするヤンガー委員会がつくられ、多様な分野の専門家を集めて解決を試みた。しかし結局、プライバシーは、包括的なかたちでは定義することすらできない、という結論に終わる。

一方、プライバシーは、人間にとって普遍的なものだとする見方がある。アーウィン・アルトマンやエドワード・ホールなどの環境心理学者たちは、動物のなわばり行動に似た人間のパーソナル・スペースを、プライバシーの原点と考えている。そして、文化によってパーソナル・スペースの大きさや、感じ方が違うのと同様、程度や作法の差はあるにせよ、いかなる文化においても、プライバシーは普遍的に存在するのだという。

プライバシー普遍説を否定するつもりはない。だがそれでも、プライバシー概念の歴史性はこの感性が、ある時点から、それなりの強度をもって、社会に共通の感覚となった。そこからプライバシーが社会問題として認識されるようになったことを示している。そして、こういったことは、おそらく一定の歴史と文化のなかで、あるいは特定の社会のしくみのなかで生じてきたに違いない。そしてそれは、まずは欧米社会で生まれ、その後、日本をはじめとする他の文化圏でも、欧米化の傾向をもつ社会改革とともに高まってきたと考えられる。

だとすれば、プライバシー感覚が、なぜある時代の、一定の文化的な背景のなかで社会問題として認識されるほどの強度をもつようになったのか。これが近代社会を考え、理解するうえで興味深い課題となる。ここでは、プライバシーは近代化とともに生まれてきた、近代固有の概念ととらえて考察する。そしてプライバシー概念の内容はどうであれ、これが近代化とともに強まった、ある一定の感覚に由来するとすれば、これもまた近代社会のしくみや性格と深くかかわっているはずである。またプライバシーが、今日、これほど日常語として用いられているにもかかわらず、概念の中身を明確にできない、ということにも魅力を感じる。そこには、この概念が近代社会のしくみを理解する上で、鍵となる概念の一つであることを予感させるものがあるからである。

そして今日、プライバシーの性格の変容が指摘されている。もしそれが事実だとすれば、それはまた、近代社会それ自体の性格の変化を知る、一つの手がかりとなる可能性がある。

本稿は、今日みられるプライバシーの変容が、現代社会の変化を見るための1つの鏡としてとらえている。そのさい、ゴフマンの社会学がもたらした近代社会の理解を活用したいと考えている。ゴフマンの研究は、近代社会をうまく描き出すとともに、多くの面でプライバシーとかかわっている。したがってこの社会学が明らかにしてきたこととのかかわりで、プライバシーの変容を見ていくことで、今日の社会変化の可能性について考えたい。

2 ゴフマンの社会学とプライバシーのかかわり

アーヴィング・ゴフマンの研究は、社会学の観点からのプライバシー理解にとってきわめて示唆的である。ゴフマンは、プライバシー論において多く取り上げられた社会学者の一人である。ただし、ゴフマンはプライバシーを研究してはおらず、その著作や論文でも、プライバシーについて、直接的にはほとんど論じていない。プライバシーという言葉も、「アメリカでは、身体障害者の最大の苦しみのひとつは公衆によってあからさまにみられることであり、それは彼らにとってプライバシーの侵害であり、彼らの隠しておきたいことがらを露出させることになると思う人が多くなっている」(Goffman:1963:96)といったかたちで触れる程度でしかない。

だが、そうであるにせよ、ゴフマンの社会学にはプライバシーと関連する議論が多いこともたしかだ。例えば、「儀礼的無関心を装うこととそのルールに違反することの一番わかりやすい例は、相手が自分をみていないことをよいことに相手を観察していると、とつぜん相手の視線が自分に向けられ、自分が無礼にも相手をみていたことがわかってしまうときであろう」(Goffman:1963:97)、あるいは「盗み見という行為は礼儀に反する行為である、と一般に感じられているのである」(Goffman:1963:97)などである。

これらはいずれも覗きの禁忌であるが、その背景には個人の聖化がある。そしてプライバシー意識の背後にも個人の尊厳、すなわち個人の聖化がある。例えば、J・H・リーマンは、プライバシーとは個人の存在に対して道德タイトルを与え、それによって個人に尊厳を与える儀式のようなものだという。

また、まなざしの問題は、観察や監視のプライバシー論に近い。例えば、「専門家でない人がエンジンを点検しているとき、他人が見ると不愉快」(Goffman:1963:55)だという、きわめて日常的な感覚の指摘も、精神病院に入院する患者が「病棟を訪れる新しい来客に

特に生き生きとした関心を示すのは、患者を観察している人がだれもいないと思えるときである」(Goffman:1963:46)や「この患者は、関与の過程で自分が観察されているのがわかる状況では、自分の関心をすばやく心の内側に向けるのである」(Goffman:1963:46)といった議論に結びつくとき、他人の観察や監視と、その行動の自由や自己意識への制約といった話につながる。すなわち、人間を対象とする観察とプライバシー倫理との関係、あるいは監視社会化によって行動や意識の自由が奪われるといった、プライバシー問題を示唆しているのである。

個人の聖化と観察や監視の問題は互いにかかわり合っている。例えば、ゴフマンが『アサイラム』で示した個人の聖性の剥奪の一つは、個人が自らの社会的自己を自分自身でつくる能力のすべてを奪われてしまうことだが、そうなる要因の一つは、収容者への四六時中の観察や監視である。このようなゴフマンの議論は、もちろん監視社会化によるプライバシー問題とかわっている。

ゴフマンは、社会的相互作用において、個人の聖なるフェイス(体面あるいはメンツのようなもの)が、お互いの思いやりや配慮によっていかに保護されているかを明らかにした。いわゆるフェイス・ワーク(互いの体面保持の協同作業)である。自らの社会的アイデンティティが壊れるのを避けるのは、人間的な必要であるが、そのための共謀関係がフェイス・ワークであり、互いの儀礼的な行為といえる。こうした個々人のフェイスの聖別は、それぞれの社会状況内でのセルフ・イメージを保護するものといえる。そして、実はその背景にあるのは、人びとの社会的な自己の一般的な脆弱さだ。すなわち、個々人のセルフ・イメージ、そして社会的アイデンティティは疑われやすく、また壊れやすいからこそ、それらは聖化されるのである。

プライバシー意識の根底には、近代人の自己の一般的な脆弱さがあることは、しばしば指摘されてきたところである。近代人は他人のまなざしに弱く、私生活を見られることにも弱い。これは私生活のスキャンダルや世評脅迫が、近代以降にとくに発達したことからも見とれる。

そしてゴフマンの社会学とプライバシーとのつながりは、個人の聖化だけではなく、その行為の演技性にも見られる。プライバシーは、個人が自己を演じ分けることを可能にし、それによって自己の社会的役割を保ち、他人との社会関係を円滑に持続させるものだともいわれてきた。個人の外向きの顔を維持するための、休息や準備ともいわれてきた。つまり、ゴフマンの社会学のテーマともいえる個人の聖性と演技性は、プライバシーの主要な二側面でもある。

近代の個人の自己の脆弱さゆえに、その体面は聖化される。また個人は、その脆弱さゆえに演技してでも、それを維持しようとするし、それが社会的にも求められている。では、聖化と演技性とはいかなる関係にあるのだろうか。

ジャック・N・ミッチェルによれば、ゴフマンの社会学において「行為者たちは常に自らの存在条件の危機を支えようとしている」(Mitchell:1978:82)。だからこそ演技が重要になる。すなわち自己を維持してゆくためには、演技していかざるを得ないのである。その意味では、ランドール・コリンズが指摘したように「マキャベリアンとしての葛藤ではなく、秩序をつくりだす道徳的機能的プロセスとしての日常生活のドラマトゥルギー」(Collins:1980)だと言えるかもしれない。

だが、ゴフマンが状況適応主義かという点、そう単純ではない。ゴフマンのいう個人の聖化は、社会状況に対して、戦略的で操作的な立場にたつことのできる、いわば個人が社会に対して「一杯食わせる」こともある可能性を含んでいるからだ。

ミッチェルがゴフマンについて述べた「神は状況のなかにいる」すなわち「近代人は社会構造にではなく、状況に従属することになる」(Mitchell:1978:113)というのでは、ゴフマンの半面しか見ていないことになる。この見方は、状況に適応的にふるまうということが、その社会状況の外側から、状況を操作する手段の一つでもある、というゴフマンの含意が抜け落ちている。こうした含意は、初期の「役割距離」や『行為と演技』、『アサイラム』から後期の『フレーム分析』まで一貫して見てとれる。ゴフマンが観察した人びとのパフォーマンスには、個々人による社会的自己の保護や維持といった消極的な側面とともに、つくった自己をどう他人に認めさせるか、といった積極的な側面があるのと同様である。

したがってゴフマンにおける神は状況の外部にある。ただしそれは語られない。それはただ単に可能性として示唆されるだけのものである。だがそれでも、その可能性を帯びていることは必要であり、ここに近代社会における個人の聖性の一つの意味がある。完全管理社会について、そして後に触れるが、情報管理社会についてゴフマンが危惧していたのも、まさにこの可能性である。

3 映画『ガタカ』: 管理社会と個人の尊厳の一つの意味

この点について、映画『ガタカ』を例に考えてみよう。この映画では、管理社会の冷酷さ、そのなかにおかれた個人の尊厳、および自らの尊厳を貫くための演技という、すでに過去のものとなりつつあると思える近代的な三つのテーマをわかりやすく見ることができる。この作品は、いわゆる近未来を描いたSFである。作品の世界では、人びとの職業もアイデンティティもほとんど遺伝子情報によって管理されている。つまり生得的属性によって、アイデンティティがほぼ決められてしまうのだ。個人のアイデンティティが、生まれたあとの努力とチャンスによって決まるとされる、近代社会の(獲得的属性の)しくみとは正反対である。

ここに登場する主人公のヴィンセントは、幼いころから宇宙飛行士を夢見ていたが、彼の遺伝子は、その職種に不適合であった。だがこの夢を捨てきれない彼は、青年になったとき、優良なDNA情報をもつ他人になり代わることで、本来ならなれるはずのない宇宙飛行士となる。一方、彼はその職業訓練に適応するため、誰も真似のできないような努力をする。身体、とりわけ心臓が弱いにもかかわらず、命がけで肉体トレーニングをし、猛烈に勉強もする。そうやって彼は、自らのIDをごまかし続けることに成功し、周囲の誰もが認める優秀な宇宙飛行士の訓練生を演じ続けて夢を実現してゆく。

1997年公開のこの映画のテーマはいかにも近代的である。自らの人生を主体的に選べない非人間的な管理社会に対して、自らの尊厳を貫き通す人間が描かれているからだ。そしてその尊厳を維持しているのは、ヴィンセントの演技である。そこには自らの尊厳を演技によって守り通そうとする個人の姿がある。一方、そのために彼は、周りの社会全体をあざむき続けるのである。

これは、本当の自己とそれを抑圧する社会といった図式の問題ではない。ヴィンセントの自己の真実が何であるかは重要ではない。ポイントは、個人と社会との関係、とくに力関係なのである。ここには個人の尊厳ということに関する、一つの考えが示されている。個人と社会の対立の局面で個人を優遇し、ときには個人が社会に優越する余地を残している。ゴフマンは近代の対人儀礼を分析し、個人の聖化を主張する一方で、個人の演技者としての性格を明らかにした。個人が自らの聖なる体面を守ることは、社会に向けて自分の体面を演技でつくり、それを維持することである。そしてそれは社会状況に適應するだけでなく、それを自ら作りだし、ときには他の人々をたぶらかし、状況そのものを操作することでもある。そしてこれはまた、伝統的なプライバシー論の二つのテーマなのである（ただしプライバシー論では、後者はあまりに遠慮がちにしかふれられないので、しばしば見逃されるか、無視されてきた）。

4 ゴフマンの社会学と個人情報管理社会化の問題

情報管理社会の発展で変わろうとしているのは、個人と社会のこうした構図であり、プライバシー変容の論点もここにある。情報管理がもたらそうとしているのは、個人の正確な管理を目指す社会であり、逆に、ごまかしのきかない社会である。これを排除型社会というかたちで問題化する見方もある。わかりやすいように思える。だが、近代に社会からの排除がなかったのかというと、そうではない。伝統的社会にもさまざまな排除はある。排除はいずれの社会にも共通してみられる現象であるから、問題はどのようなかたちで排除するかだ。したがってこの言葉では、変化の本質をとらえられないように思える。

データはごまかしがきかない(もちろん、実際にはそうではないのだが、ここでは事実ではなく社会的な共通感覚を考えている)。でもごまかしなどない方がいい。正しい情報に基づくことがやはり正しいことである。このような考え方に、私たちが共感してゆくならば、情報が正確なものであれば、個人は情報を通じて管理されてよく、そのさい問題になるのは、管理されることの是非よりもむしろ、適正な管理だけである。

加えて、政府やさまざまな機関による管理への信頼感も高まっている。かつては政治権力への不信感や恐怖感から、人びとの、政府や組織による管理への反発が生まれていた。しかし、今日ではそうした恐怖感も遠のいてしまったといわれる。『1984年』のビッグ・ブラザーは、もはや遠い過去の話なのである。とくに現代の日本のような社会では、そうになっている。

こうしてプライバシーへの関心も、人びとが管理や監視されることそれ自体には向かわず、もっぱら管理されている個人情報の漏洩や転用、あるいは不正使用の方へと集中してゆくことになる。だがその不正とは、まさにヴィンセントが自己を守るためにおこなったことでもある。彼は自らの社会的自己を保持するため、自らの遺伝子情報を偽った。そしてそれが、彼にとっての尊厳であったのだ。いうまでもなく遺伝子情報は、いわば究極の個人情報である。かつては、不正混じりの自己作りと自己の維持こそがプライバシーであった、といえ過ぎであろうか。ただゴフマンのいう個人の聖性もまた、そのようなものであったといえよう。

プライバシー論者のチャールズ・フライドによれば、ゴフマンは情報化社会について

ぎのように述べていたという。「データの蓄積と検索の新しい方法は、個人の遠く離れた、あるいは忘れられた過去についての情報に、たやすくアクセスできるようにすることでプライバシーにとって脅威となる。そしてこのことは、個人が自分自身の、そして他人の自分についての定義を容易に変えることがかつてほどはできなくなる、ということの意味しているが、それがまさにそうだろう」(Fried:1958:221)²⁾。

ゴフマンにおいて、社会に対抗する個人の構図がもっとも明確になっているのは『アサイラム』である。この本では完全管理施設が、いかに収容者たちの尊厳、あるいは人間としての聖性を奪ってゆくかが描かれている。だがその一方で、ゴフマンが注目しているのは、施設のきめ細かなルールを裏をかこうとする収容者たち、そして彼らと共謀するスタッフたちである。収容者たちは、収容所のルールに反してタバコを入手したり、施設の一定の場所を特権的に使ったりといった利便を獲得する。ここでの議論と関係するポイントは、これらによって収容者たちが、一時的にせよ、自らの尊厳や聖性をわずかに取り戻せたと思える、ということである³⁾。

ゴフマンは、近代の個人を、聖化された人格であると同時に、マキャベリアンでもあることを明らかにした。これらの両立の背景には、社会に対抗する個人という近代の構図があった。そして、もともとの近代社会のプライバシー意識の特徴の1つも、これが基礎にある。だがそれは、現代のプライバシー意識のなかでは、弱まりつつあるように思える。

こうしてプライバシーのあり方も、密かにそして緩やかに変容しつつある。ただし、以前のプライバシーを評価し、現代のプライバシーは偽物だといったわけではない。現代の監視社会批判には、このような見方が暗に含まれていることが多い。だが、そうした立場をとろうとは思わない。社会意識の変容の背景には、社会そのものの変化が伴っている、という考え方もできるからだ。すなわち、かつての社会であれば問題であったことが、社会そのものの性格が変化したために、問題ではなくなるという可能性である。この観点に立てば、かつてのプライバシー意識は、かつての社会に対応し、いまのそれは、現代の社会に対応してきているのである。

ゴフマンとプライバシーの関係について、アンソニー・ギデنز氏は『モダンティと自己アイデンティティ』において、つぎのように述べている。「ゴフマンは、日常生活においてどのようにしてプライバシーが維持されているか、なぜ個人がプライバシーをそれほどまで重視するかについて、少なくとも関心を持っていた。他方でゴフマンは、プライバシーを普遍的に必要とされるものと考えており、歴史的コンテクストにおいてプライバシーを考えることはなかった。」(Giddens:1991:269)

その一方で、ギデنز氏は『社会理論と現代社会学』において、ゴフマンの社会学が、社会における制度の再生産の問題と関連があること、それが社会変動のような「マクロ的な構造の変化の理解」に結びつくものであることを指摘している。ギデنز氏は、「ゴフマンの仕事とブローデルの仕事のあいだに類似点を見出すことはそう困難ではない」という。それは「両者とも、日々の社会生活の性質に、より明確には、制度的再生産の非常に広範なパターンへと日常の社会生活を結びつける様式に、光を当てている」(Giddens:1987:189)からだ。そしてさらに、「もしゴフマンの仕事がこうしたことに無関係に見えるとすれば、その理由は、相互行為秩序がそうした変動過程にかかわりなく続いていくものとしてあるからではない。逆に、それは彼が、変化する制度的調整がいかに社会生活のセッティング

の変化を条件付けるか、またそうしたセッティングの変化によっていかに条件付けられるか、ということ考察していないためである。社会理論へのより包括的なアプローチがこうした課題に、ゴフマンが発展させた主要な着想を取り込みつつ、着手してはならないという理由はない」(Giddens:1987:189)という。

5 プライバシーとはいかなる概念か？

個人の聖性と演技性

ゴフマンの社会学とプライバシーとの関連を見てきたが、それではプライバシーとはいかなる概念か、その多様な意味について簡単に見ておくことにしよう。まずプライバシーは個人の尊厳や聖性とかかわり、そこから私生活領域の聖域化といった考え方もでてくる。かつての社会に比べて、私的な、そしてとりわけ個人の私的領域の保護という考えは、近代化のなかで高まったといえるだろう。これはリーマンが指摘したように、儀礼的な性格を帯び、ゴフマンの体面への儀礼や儀礼的無関心に通じる。

つぎに演技とのかかわりである。複雑化した近代社会では、個人は一人で多様な社会的役割をこなすことを求められる。そのため個々人は、相手や場面に応じて様々な自己を演じ分けることになり、その矛盾を隠すために、それぞれの役割のあいだを隔てておく必要がある。いささか古風な例だが、家で妻に頭が上がらない姿を会社の部下には見せられない、といったようなものである。このような議論は、ジンメルからゴフマンのドラマトウルギーにいたる、社会学のいわば十八番でもある。

自作自演のアイデンティティ

近代では、個々人の社会的自己は、原則として自分自身でつくることになっている。自らのアイデンティティの確立は、青年期におけるもっとも重要な課題であるといわれたりしてきた。こうして私たち近代人は、自らの存在をつくることを煽られ、またその存在証明も煽られることになる。石川准が「アイデンティティ依存症」と呼び(石川:1999)、土井隆義が「個性を煽られる若者たち」(土井:2004)と指摘したような問題状況をもたらす素地は、近代社会そのものの基本原理に端を発している。すなわち、アイデンティティは与えられるものではなく、獲得するものとされるようになったことである。

こうした手作りのアイデンティティには数々の弱点がある。一つは、他人からの否定に弱いということだ。近代の個人に、その自己呈示の整合性がより強く求められるのは、ひとえにアイデンティティが個人の内面において統一されたものであるべきだ、という道徳観があるからで、一般的にはいまでも多分にそうである。近代では、個人を判断するうえでの頼りはその内面(その本性や人間性が含まれている)であり、そこに真実の自己があるとされてきた。

他人のまなざしへの恐れ

内面化されたアイデンティティは、あくまで他人のまなざしによって判定されるしかない。そのため人びとは、個人のふるまいが伝統的制度の役割遂行に近かった以前の時代よりも、はるかに慎重に自己の矛盾を隠さねばならず、自らが他人に与えている印象の正し

さを維持し続けるために、演技せざるを得なくなる。皮肉にも、内面を人間の判定基準にすることは、人びとの意識をより外見へと向けさせてきたのである。

実際に、近代社会では、以前よりもはるかに私生活の行動はスキャンダル化しやすく、それによって社会的役割が失われる危険性も高まった。このような社会では、プライバシーが以前にも増して意識されてきて当然といえるだろう。近代社会には「アイデンティティの危機が内蔵されている」とピーター・バーガーたちはいう(Berger 他;1973:106)。そして近代特有の、個人の自己の脆弱さが、そもそものプライバシー意識を生み出したことは事実であろう。

脆弱な自己のための親密性

バーガーたちはまた、同じところでつぎのように述べている。「安定したアイデンティティは安定した社会的文脈をもつ相互作用からのみ現出することができる」(Berger 他;1973:106)。これは個々人のアイデンティティが、制度的に規定されていたかつての社会のことである。一方、個々人のアイデンティティ形成を自由化した(すなわち、脱制度化した)近代社会では、個々人のアイデンティティを支える社会的文脈とは親密性のことである。しかし、そこからは伝統的社会がもっていた社会的文脈の安定性など期待できようはずもない。しかし、だからこそ近代では親密な関係の安定性が重視され、異様なほど強調されてきたのである。

プライバシー論の多くは、プライバシーが親密さの関係をつくり、維持するはたらきを強調する。そしてそれが近代における人間関係の最重要のものだという。信頼や愛情、尊敬などの関係はすべて親密さの文脈のなかで育まれ、また維持され、それを支えるのがプライバシーだというのが彼らの主張である。彼らにとって、近代の脆弱な自己を肯定し、支えてくれるのもまた、よき親密さだけなのである。

私生活の神話化

またプライバシー意識は、他人への覗き趣味の強まりや人びとの日常を物語化する文化の形成とも関係している。個人の私生活の神話化とは、ゴシップ記事やワイドショーから、個人の生活や人生をテーマにした近代小説や映画のことである。これらを並べたからといって、これらが芸術的に同質だとみなすのではない。あくまでプライバシーという観点からの共通性だけの話である。それはさておき、これらは近代における個人の聖化と関係しているという見方がある。だとすれば、プライバシー意識を生み出した人格崇拜は、皮肉なことにプライバシー侵害をもたらす要因でもあったということになる。

個人の神話化は、近代になって一般化し、またそれはプライバシー意識の高まりと関係がある。このことは、いくつかの観点から考えられる。一つは、近代になって個人が自らの自己を自分で作り出したとき、そこに人間の真実が隠されているとされているために、人びとはそれが見たいと思うようになったことである。

またすでにみたように、社会の規範をのり超えてゆく近代の個々人の性格というのは、「規範を破る力、禁止をのり超え、侵す力」(湯浅;2006)ともいえる。だとすれば、それはエロティシズムの対象となりうる。近代社会では、個人の私生活そのものがエロティシズムの対象となり、それゆえにそれらへの覗き趣味の欲望も生まれてきた。プライバシーと

は、この欲望に対応し、また対抗するかたちで生じてきた聖域保護の意識と考えられる。

規範や文化の源泉

さらに近代の個人は、規範を破る存在であるだけでなく、規範について自律した判断をくだすとともに、作り変える可能性をもつことが指摘されている。近代になって、人びとの生き方や暮らし方は、道德観から服装にいたるまで、さまざまに変化してきた。これらの多くは、まさに個々人の生活から生まれてくるのである。社会のルールや法律もそうだが、さらに広く一般の私たちの文化も社会規範であり、これらもまた個々人の私生活から生まれてくる。例えば、前近代のライフスタイルが神話や祖先からの伝統に由来するとすれば、近代のそれは、芸術家やクリエイター、デザイナーなどといった個人、あるいは一定のグループの人びとの生活のなかから生まれだしてくる。つまり近代の規範や文化、多様なシンボルの発信源は、個々人の私生活や内面ともいえる。その意味で、そこはやはり神話化されるべくして、そうになっているともいえるだろう。

6 プライバシーから、ポストプライバシーへ

これまで近代のプライバシーの諸相を駆け足で見してきた。そしてこのプライバシーは、いまや変わりつつある。その変化の仕方は、システムティックである。誰かが意図して変えようとしている、といったものではなく、社会全体のシステムティックな変化に合わせて、プライバシーも変わりつつある。例えば、『1984年』は、強大な権力者が現れて、人びとを監視社会へと順応させていくという話だが、今日の情報管理はもっとソフトであり、むしろ人びとの合意形成のなかで、あるいはエミール・デュルケムの古典的概念を用いるならば、人びとの集合感情の変化のなかでもたらされつつある、とも思える管理社会への移行なのである。

こうしたプロセスについて、ディビッド・ライアンは、「監視という概念は、固定された一状態ではなく、社会的な方向性」(Lyon:56)だと指摘し、「監視という継続的で双方向的なプロセスを含む「社会的オーケストレーション」のような何かが起こっていると考えたい」(Lyon:56)と述べている。社会的オーケストレーションとは、政府だけでなく、民間企業、各種の団体や組織、そして個々の市民たちも協調・共謀しつつ、監視化を能動的に進めてきているということだ⁴⁾。

監視社会化、あるいは情報管理社会化がこのようなかたちで進行することの背景には、プライバシー意識の変化がある。かつてのプライバシーは監視社会化や管理社会化と対極に位置し、それらに反対するさいの強力な論拠の一つであった。ところが、ある時点から、プライバシーがそれらと手を結ぶようになった。本当の、そして共通の敵は、管理された個人情報悪用したり、盗んだりする輩であるとされ、情報管理側とプライバシーとは、それらに対して共同戦線をはるようになった。

スティーブン・ノックによれば、個々人が個人情報で管理されることで、プライバシーはより発展してきた。例えば、情報管理されることで、私たちがかつて以上に他人に干渉されず、また誰ともかかわることなく暮らしたり、買い物したりできるようになっている。だから情報管理は、むしろ私たちのプライバシーのために支払うべきコストとなりつつあ

るとノックはいう(Nock;1993)。

こうしたなか、プライバシーの意識が向かう対象が変わりつつある。これについてウィリアム・ボガードは、つぎのようにいう。「今日、プライバシーと関係があるのは、人格や個人や自己、あるいは閉じた空間とか、一人にしてもらうこととかではなく、情報化された人格や、ヴァーチャルな領域なのだ。」(Bogard;1996:200)

かつては、プライバシーを一定の私的な空間領域と同一視するような領域説が生まれたほど、空間の重要性が大きかった。また個人の秘密や隠しごとと関係があるという見方も強かった。もちろん、これらの考え方は、おおむね否定的に見られてはきたが、それでもこのような見方が現れてくるほど、プライバシーにおけるそれらのイメージは大きかった。

プライバシーについて、かつての有力な見方は、究極のプライバシーは個々人の内面にあり、またそれを取り囲む身体、そしてさらにその外周をとりまく私的領域や親密さの人間関係といったように、個人の内面をめぐる同心円状のものと考えるものであった。以前のプライバシー論を読むと、私的空間のプライバシーとともに、身体や親密さや内面のプライバシーが中心になっている。だが、いまやそうではない。プライバシー保護の中心は、明らかに個人情報問題だ。すなわち、プライバシーの重心が、個人の内面とその周辺から、個人の手を離れた、個人にとって外在的な情報システムへと移ってきたのである。そうしたなか、私たちは個人情報の扱いに対して、ますます神経質になる一方で、私生活を外部から管理されることへの抵抗感の方は、徐々に薄らいできている。

情報技術が進歩し、個人情報問題の深刻度が増したため、相対的にそれ以外のものの印象がやや薄らいだだけであろうか。だがボガードが指摘したように、それだけではない。もはやプライバシー意識のあり方そのものが、変化してきているのである。

例えば、かつてのプライバシー論では、プライバシー概念のキーワードは親密性であるといわれた。そして他人との親密な関係を守ることこそが、プライバシーのもっとも重要な役割の一つであるとされた。ところが現在のプライバシーにおいて、親密さの強調は見られないどころか、むしろ親密さに対する社会の監視や管理が求められてきている。

すでに見てきたように、親密さ重視の考え方には、私たちの自我の支えが親密性によるとされる信念と同時に、その関係の安定性への強い期待がこめられていた。ところが親密さそれ自体が、本来、それほど安定したものとはいえないものであることが、あきらかになってきた。ウルリッヒ・ベックは、「愛とか親密性とかという言葉が全く逆の意味を持つようになった」と人びとが思うようになったと指摘し(Beck;1986:196)、このことが示しているのは、「測り知れない不安定化、傷心、そして「途方に暮れているのだが、それを隠そうと武装した状態」である。途方に暮れながら、男女が結婚と家族といった日常において自己と向かい合っている」(Beck;1986:196)という。所詮、それは感情的なつながりに過ぎないものなのだ。

社会関係の親密性が、いつとき安定的でありうるように見えたのは、そうすることによる経済的なメリットがあるあいだか、それともなかば制度化された親密さのイデオロギーによるものであった、といった見方が有力になってきた。しかしそれでは、自己の脆弱さは何によって支えればよいのか。この流動的な社会のなかで、それがもはや制度的な支えなどもちえないことには変わりはない。だとすれば、多くの人びとはそれでも親密さに頼ろうとせざるをえないだろう。こうした親密さの矛盾は、現代社会の数々の社会問題の温床

とみなされるようになった。

その一方で、携帯電話やインターネット、メールなどが普及し、これらの基盤を形成する情報システムが、社会関係の新たなコンテキストとして急浮上してきた。しかも、この電子的な社会空間を人びとはとても創造的に活用し始めた。いまとなつては常識化した活用法の数々は、これらが生まれてきた当初はまったく予測されてはいなかった。これらによって人びとは、きわめて活発に他人とコミュニケーションするようになるだけでなく、その活用の範囲や深さもはじめの予想をはるかに超えて広まっていった。かくしてそれらは、人びとの自己呈示の場としても活用されるようになった。自らの個性やアイデンティティを、そこで他人に見せるのである。その自由度は、対面的な社会的相互作用の比ではない。さらに売り買いなどをしたり、それによって自我の支えを求めたりする者も現れてきた。

つまり親密性によって信用や信頼が形成され、自我も支えられ(ると信じられ)ていた時代とは異なり、新たなかたちで、それらをおこなう関係性のコンテキストが生まれてきた。社会関係一般をこのようなかたちで語るのは、飛躍した話のようにも思える。だがプライバシー意識の変化は、私たちの社会関係のベースとなるものが、全般的に変化しつつあることの兆候といえなくもない。つまり、プライバシーは親密性に代わり、この新たな関係性のコンテキストに重点をおくようになってきている。

そして同じことは、身体的な関係についてもいえる。ゴフマンが研究対象としていた対面的で身体的な相互作用によっておこなわれていたことは、情報メディアを介したものに取って代わられてきているが、その度合いは高まる傾向にある。かつては電話ではなく、直接会って話を、といわれていたようなことも、メールで片付けられるようになってきた。以前の電話の位置づけと、今日のメールの違いもここにある。他のコミュニケーション手段では、直接的で対面的相互行為がもたらす関係性のコンテキストには、まったく及ばなかったのだ。ところがメールなどの情報メディアの相互行為のコンテキストは、対面的で身体的なそれとの比較において、ますますその強度を増してきている。妻が夫にメールで離婚の言い渡しをすることすらありうるのだ。

以前は身体や身につける服装、装身具などは、個人の社会的自己にとっての主要なメディアであった。身体は個人がいかなる立場や地位にあるか、その文化性、能力や実力、個性や性格を他人に示すものの中心にあった。だからこそ、個人の身体のプライバシーが重視されてきた。だが身体に代わりうるほどの情報メディアが現れてくると、身体のプライバシーもバイオテクノロジー的なものへと意味を変化させつつある。

同様のことは内面にもいえる。近代になって、個々人の自己の本質は、それぞれの内面にあるという考え方をもとに社会が組み立てられるようになった。内面を磨くことは重要とされ、外見を磨くことは偽物とされた。結婚でも何でも、もっとも大事なものは、相手と自分の心や内面だという見方が強まった。しかし内面の基準で他人を判断できたのは、それを判断する標準的な基準が共有されているような社会においてである。人びとが共有する標準的な物語がなくなった社会においては、内面とは別のものを中心に社会が築かれていくようになる可能性がある。

7 ゴフマン社会学のマクロ的な応用

このようなことは、既にさまざまなかたちで指摘されてきている。例えば、大きな物語の消失、メタ物語の崩壊、パノプティコン型の社会からスーパーパノプティコン型の社会への変化といったような議論もそうであろう。ただし、それでも私たちの日常は、いわれるほど変わってきているように見えないかもしれない。

実際に周りの現実を見まわしても、表面的には何も変わらないような気もする。家族関係や親密さも多少の違いはあっても、以前と大きく変わらないようにも見える。見方によっては、変わったところよりも変わっていないところの方がはるかに大きい。すでに述べたように、身体的な関係の重要性はいまもなくなっていない¹⁾。それは内面も同じである。だがその一方で、情報環境が大きく変わりつつあるなか、これらに何ら変化はない、といえるだろうか。仮に「個人は社会以上に道徳的でありうる」というのが、ゴフマンの個人の尊厳の立場であるとすれば、監視社会や管理社会の背景にある論理には、「社会は個人以上に道徳的である」という前提がある。

プライバシー意識の変容は、社会の一般的な変化を知るのに適した指標の一つではないかと思っている。この概念は現代生活にとって、とても日常的なものであり、その意味の多様性によって、私たちの社会生活のきわめて多くの側面とかかわり合っている。また情報と深くかかわり、情報化による影響を見やすい。また、それは近代に生まれた歴史的な概念だという点で、その変容は近代社会そのものの変化の観察にも適していると思える。これが近代化とともに生まれてきたとすれば、その変容もまた近代社会そのものの変化を示す可能性が高いからだ。またすでに見たように、この概念はゴフマンの社会学と深い関係にある。だとすればプライバシーを通じて社会変化を考察することは、ゴフマン自身が考えていたよりもはるかに「マクロ構造的」特性の理解に貢献するものになる、というギデنزの主張(Giddens:1987:187)を試すものとなりうる。つまり、プライバシー研究は、ゴフマンの社会学のマクロ的な応用の試みといえるのである。

[注]

- 1) (Collins:1980:181)を参照。
- 2) ピーター・バーガーたちによれば、「近代の人間は、非常に差異のある、しばしば相矛盾する社会的文脈のなかで、絶えず変身をおこなっている。生活歴という時間的關係から見ても、多様な社会的世界の間をつぎつぎと移動している」のである(Berger 他:1973:214)。
- 3) ゴフマンは「第二次的調整は被収容者に、自分は環境を何程か制御できるのだからまだ自分自身の主人なのだ、という重要な証拠を与えるものである」(Goffman:1961:57)という。
- 4) これに関してライオンは、「音楽を奏するのは、オーケストラ・ピットに座って指揮者と協調・共謀する能動的主体」だと述べている。(Lyon:65)
- 5) これに関しては、草柳千早(2010)を参照。

[文献]

- Altman, I., (1975) *The Environment and Social Behavior: Privacy · Personal Space · Territory · Crowding*, BROOKS/COLE PUBLISHING COMPANY.
- Beck, U. (1986), *Risikogesellschaft*, Suhrkamp. (ベック 1998 『危険社会』, 東廉・伊藤美登里訳, 法政大学出版局.)

- Berger, P.L., Berger, B., and Kellner, H., *The Homeless Mind*, Random House Inc., 1973. (『故郷喪失者たち』 1997 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳, 新曜社.)
- Bogard, W. (1996) *The simulation of surveillance*, (ボガード 1998 『監視ゲーム』, 田畑暁生訳, アスペクト.)
- Collins, R., (1980), Erving Goffman and the development of modern social theory, in Ditton, J. ed., *The view from Goffman*, Macmillan.
- 土井隆義(2004), 『「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える』 岩波書店.
- 榎原猛編(1991), 『プライバシーの総合的研究』, 法律文化社.
- Fried, C. (1968), Privacy: a moral analysis, in *Philosophical Dimensions of Privacy*, Schoeman, F.D. ed., Cambridge University Press, 1984.
- Giddens, A. (1987), *Social theory and modern sociology*, Blackwell (ギデنز 1998『社会理論と現代社会学』, 藤田弘夫監訳, 青木書店.)
- Giddens, A. (1991), *Modernity and Self-Identity*, Polity Press. (ギデنز 2005『モダンティと自己アイデンティティ』 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳 ハーベスト社.)
- Goffman, E. (1967), *Interaction Ritual*, Anchor Books, (『儀礼としての相互行為』 1986 広瀬英彦・安江孝司訳, 法政大学出版局.)
- Goffman, E. (1959), *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company Inc (ゴフマン『行為と演技』 1974 石黒毅訳, 誠信書房.)
- Goffman, E. (1961), *Asylums*, Doubleday & Company Inc. (ゴフマン 1984『アサイラム』 石黒毅訳, 誠信書房.)
- Goffman, E., (1963) *Behavior in Public Places*, The Free Press (ゴフマン『集まりの構造』 1980 丸木恵祐・本名信行訳, 誠信書房.)
- 石川准(1999), 『人はなぜ認められたいのか』 旬報社.
- 草柳千早(2010), 「相互作用と身体の前: ゴフマン共在分析の視点から」『社会学年誌』 51 号, 早稲田社会学会.
- Lyon, D. (2002), D・ライアン『監視社会』, 河村一郎訳, 青木書店
- Mitchell, J.N. (1978), *Social exchange, dramaturgy and ethnomethodology*, Elsevier.
- Nock, S.L. (1993), *The costs of privacy: Surveillance and reputation in America*, Walter de Gruyter, Inc.
- Reiman, J.H. (1976), Privacy, Intimacy, and Personhood, in *Philosophical Dimensions of Privacy*, Schoeman, F.D. ed., Cambridge Univ. Press, 1984.
- Westin, A. (1967), The origins of modern claims to privacy, in *Privacy and Freedom*, The Association of the Bar of the City of New York.
- 湯浅博雄(2006), 『バタイユ』 講談社学術文庫.
- アンドリュー・ニコル(1997), 『ガタカ』, コロンビア映画.

(阪本俊生: 南山大学)